

特別インタビュー

夢のむこう

Goodbye to JCCNC : 28 years of friendship

The Emma Project, Inc.
代表 秋山エマ

ベイエリアに来たきっかけをお聞かせください。

1977年(45年前)に大学留学のために来ました。5年後の82年にスタンフォード大学院を卒業し、その後約10年間は学業と仕事でオックスフォード、パリ、東京、ニューヨーク、ロサンゼルスを転々とし1993年に再びベイエリアに戻りました。



大学留学当時は今とは全く違うベイエリア生活でした。最初の2年間は学生寮で一粒も日本のお米を食べませんでしたし、高い国際電話は緊急時に数分のみ。日本人は本当に少数派で完全にアメリカ社会に同化せざるを得ない日々でした。しかし振り返ると人生で一番楽しい時期でした。同年代にはスティーブ・ジョブズやビル・ゲイツがいました。スティーブとはパーティ等で何回か会ったことがあり、アップルもいつか日本進出したい、という相談を受けたこともあります。因みにJCCNCの月報に対談を載せたハリリー・サール氏はスティーブの「誰でも使えるコンピュータ」というとてつもない夢を後押ししたメンターでした。ビル・ゲイツはベイエリアには住んでいませんでしたが、当時からスタンフォード工学部関係や、シリコンバレーのエンジニアの間では頻繁に話題がでていました。私の家族はシアトルエアポートまでビルが迎えに来てくれて、彼の家でトランポリンをして遊んだという仲で、スティーブやビルというのは身近な存在でした。またスタンフォードの親友はセマンティック創業期のメンバーの一人でした。有名人を知っていたということをはげらかしているわけではなく、この例をとってもわかるように、今とは比べものにならないくらいの文化的刺激と夢があった時代でした。

JCCNCとの関わりを教えてください。

28年前の1994年にA.Media, Inc. (California Corp)として企業会員になりました。現経済ソサエティの前身である会社ソサエティの中核メンバーから杉浦元事務局長を紹介され会員になりました。その後JCCNCを積極的に支援する活動をしたことが評価され、5年後の1999年11月に理事に推薦されました(23年前)。

JCCNCに入会して初企画はスタンフォード大学工学部教授を中心に、インターネットという言葉があまり知られていなかった1994年春に「インターネットビジネスの将来」というセミナーをスタンフォード大学 Faculty clubで行い、それを『JCCNCセミナー』として共催としたことから始まります。それからは弊社がセミナー企画をする度にJCCNC共催として何本もイベント企画しました。LinuxというOS開発者のLinus Torvalds氏を連れてきてセミナーをしたこともあります。また月報へは55回寄稿しました。私は執筆業ではなかったのですが、職業柄投資やテクノロジー動向を雑誌に寄稿していたのがきっかけで、その後、社会、文化という側面に触れたエッセイを書くようになりました。中央公論新社の『婦人公論』やリクルート社の雑誌に連載されたものを出版社の許可を得て月報に掲載したのですが、JCCNCだけのために寄稿したのも沢山あります。カリフォルニアワイン王のロバート・モンダヴィ氏やハリリー・サール氏(前述)との対談記事などはJCCNCのためだけの企画でした。



現在のお仕事の内容を教えてください。

10年ほど前からクラシック音楽の分野を中心とした芸術家支援を始めるようになりました。エマプロジェクトはクラシック音楽のコンサート企画主催、芸術活動、啓蒙活動の企画主催をする組織です。日米欧が活動拠点ですが、2016年頃からめっきり欧州(主にフランスとショパンの祖国ポーランド)の活動が多く



JCCNCも後援したショパンコンサート
Palo Alto, 2015 (Poland ショパン協会協賛)

なりました。2015年にPalo Altoで主催したコンサートがベイエリアでの最後の活動となり、その後は日欧の生活が中心となったためJCCNCの会合などにもなかなか出席できなくなりました。よって私のことを知らない方も多いかと思いますが、先般、前会頭の萬タシャさんとお話ししていた時に「私がJCCNCに入った頃は女性の理事はエマさんだけで、総会でもご意見をはっきり述べられていたのを鮮明に覚えています。」と言って下さいました。そういう時期もありました。

今までにやりがいのあったお仕事や、困難を極めたお仕事があればお聞かせください。

困難1；大学院をですぐにWall St.の投資銀行に就職した時は80年代バブルの高揚期。日本人が米国各地のトロフィービルなどを買って有頂天になっていた頃、先輩のユダヤ系アメリカ人金融マンが「アメリカは日本人にカネを儲けさせて終わるほど甘いところじゃないよ。」と忠告しました。日本人が高値で買い取った頃を見計らって、90年から不景気になる政策がとられました。私が取引を担当した日本人投資家の多くが倒産、中には自殺した方もでて、やりきれない思いをしましたが、これが私の直面した困難第一号でした。疲れきって長閑な田舎だったベイエリアに帰りましたが、のんびりしたのも束の間、今度は90年初頭大不景気から脱皮するクリントン政権の戦略がシリコンバレーに向けられました。ゴア副大統領がハーリーの家に来て「情報スーパーフリーウェイ構想を推すので協力してほしい」ということになり、再びバブルの中心にはまり込んでしまいました。**困難2**：ネットバブルの最中に家族が起業、約3000万ドル（当時では多額）の投資を受け「流行りのIPO」を目指しました。VCが私にサインを求めた書類には「経営者の重大な過失の場合には投資額を返せ。」というものでした。私の家族は創業者・CEOになりましたが、日々お金の話ばかりのCEO職は自分に合わないと思いつつCTOとなり、代わりにスタートアップからIPOへ漕ぎ着けたトラックレコードのあった人を高額でCEOとして雇いました。家族は日々のストレスで病気になり色々大変なことがあったのですが、to make a long story short,この起業はSV起業の確率9割のほうに入り数年後に解散となりました。高額給料の雇われCEOは仮病を装って逃げましたが、病気だった創業者は、沈む船と共に沈む船長として『船長の最後退船』を全うしました。起業、資金調達、大量採用、大量解雇、病気、倒産、後始末、この一連のプロセスは私の体験した第二の困難でした。

やりがいのあった仕事；10年程前から芸術家支援の仕事を始め、それからは全てやりがいがあります。仕事をすれば大変なのは当たり前ですが「**大変だけど辛**



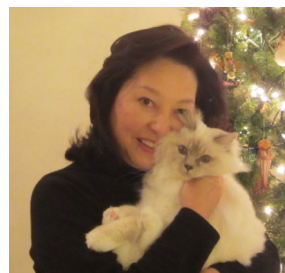
元サンフランシスコ総領事の田中信明様ご夫妻も応援に来て下さいました。
(右は元世銀副総裁の柏谷様ご夫妻) @ 東京のコンサートで。

くない」のです。私たちは皆天からもらったタラント（英語のtalentの起源）がありその天分を使って仕事をしているとき、天命に生きている時は、**例え大変でも辛くはなりません**。芸術支援の仕事は、過去に経験したWall St.やSV投資のメンタリティとは正反対で利益を度外視しないとやってはいけません。しかし、「自分が喜び、人が喜び、神が喜ぶ」三拍子揃って仕事をしていると、不思議とお金が考えもつかないようなところから回ってきて驚いています。

皆様へアドバイスすることがあれば教えてください。

米国のビジネス経験を通してアドバイスしたい事は沢山ありますが、今回の限られたスペースでお伝えすることは無理ですので、ごくポイントだけ述べます。ビジネスに限らず選択肢での間違いの多くは「お金」。お金を中心に考えると間違えます。また、何をするにもmotivationを検証する必要があります。そして自分の最も大切にしているcore valueは何かを明確にし、そのcore valueを外さずにいること。最後に、生きる能力は脳力ではないので、人間という最も愚かな生き物の浅はかな脳で考えるより、自然の流れに身を任せ宇宙からの無限の恵みを受取るほうがより幸せになれると痛感しています。

パンナム機でサンフランシスコに来たことが昨日の事のように。Toshi's Sushiでお寿司を頼っていたステーキも今や天国。



Life is very short. 全ては東の間の夢のごとき。夢のむこうでは『何をしてきたかよりどんな心で生きてきたか』が問われます。長らくご縁のあったJCCNCの方達への最後のメッセージは **Love while you live.**

adieu...